

「ちっこい世界だけど あたしらのほとんどすべて」  
いくえみ綾『プレゼント』より

映画『タナーホール』の舞台となるのは、アメリカの田舎町にある全寮制の女子校だ。日本にも寮のある中学や高校はあるものの、全寮制で学校と宿舍が一体化した学校というのは数えるほどしかないようで、私たち日本人にとってこの Boarding School（ボーディングスクール）＝寄宿学校は馴染みの薄い存在だろう。実際、私もこれまで寄宿学校に通っていたという人に会ったことがなく、その情報は必然的に小説や映画によって得てきた。

寄宿学校と聞いてすぐに思い出すのは、小学生のときに夢中になって読んだ児童小説『おちゃめなふたご』シリーズのこと。計6冊からなる同シリーズは1940年代にイギリスの作家イーニッド・ブライトンによって書かれたものだが、少女小説の多くの名作がそうであるように、時代を越えて読み継がれてきた作品だ。物語は主人公の双子がセント・クレア学院という寄宿学校に入学するところから始まり、最終学年になって生徒会長に選ばれるところで終わるのだが、シリーズ2冊目以降は双子よりも新学期ごとに転校してくる少女たち（やたら転校生が多い学校なのである）にスポットが当てられている。転校生はたい

てい何らかの問題や秘密を抱えていて——裕福なことを鼻にかけたり、親子関係が良くなかったり、サーカス育ちで普通の学校生活になじめなかったり——、主人公の双子ら他の生徒と共同生活を送る中で次第に心を開き、その問題と向きあっていく。相部屋で起床・就寝時間も決まっっていて、外出するにも許可が必要という規則に縛られた生活に花を添えるのは、真夜中のバスデーパーティなどの秘密のイベント。その美味しそうな食べ物描写や先生に見つかりそうになるスリリングな展開に魅了されて、共同生活に向いていないにも関わらず寄宿学校に憧れを抱いたものだ。

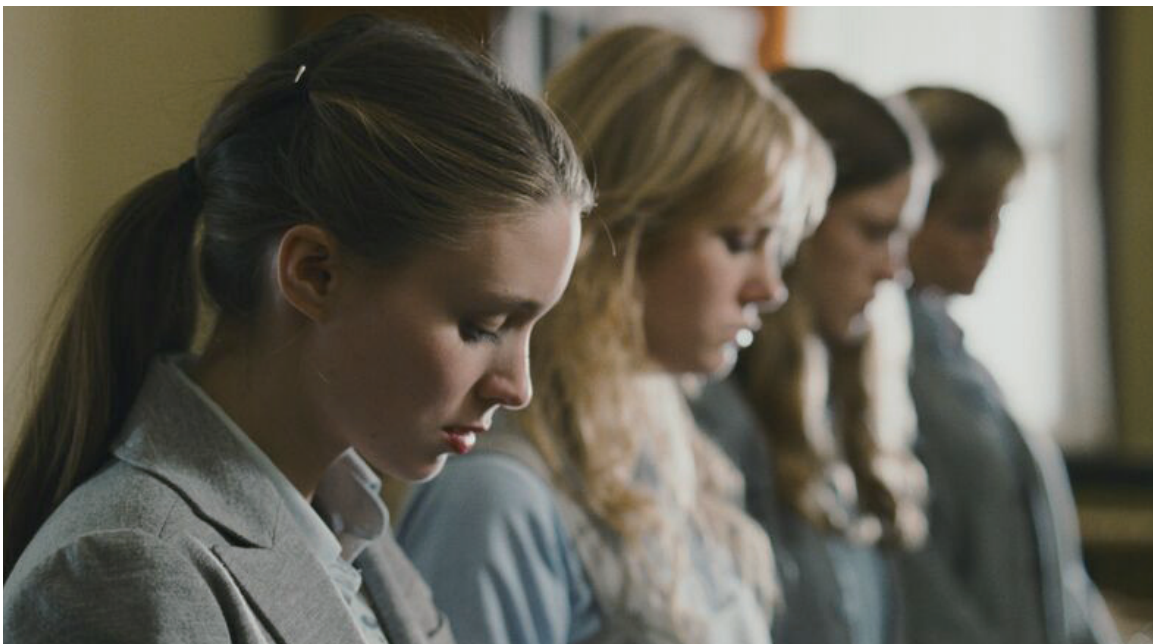
時代設定や少女たちの年齢、恋愛要素の有無といった違いはあるものの、寄宿学校「タナーホール・スクール」は、私がこの『おちゃめなふたご』で培ったイメージに沿うものだった（ちなみにどちらの作品も学校名が題名になっている——『おちゃめなふたご』の原題は『St. Clare's セント・クレア』——という共通点もある）。それは学校生活を描く作品の中において、寄宿学校という舞台がそれだけ特殊だということでもあるだろう。単純なことだが、寄宿学校というのは通学制の中学・高校や大学寮よりも閉ざされた世界として存在するため、その世界への出入りがより重要な意味を持ち、それ自体が事件になる。また、学校外の世界が存在しないせいも、多くの青

春映画で描かれる学校内の「カースト制」も希薄だ。グループや派閥はあるにせよ、その派閥間の差異や交流／敵対ではなく、ひとつのグループ内の少人数に焦点が当てられることになる。

『タナーホール』は主人公のフェルナンダ（ルーニー・マラー）と、彼女の親友のケイト（ブリー・ラーソン）とルカスタ（エイミー・フアーガソン）、そして転校生のビクトリア（ジョージア・キング）の4人の物語だ。

★1 『若草物語』『細雪』『阿修羅のごとく』『海街diary』といった4姉妹ものに加え、『セックス・アンド・ザ・シティ』『リンダ・リンダ・リンダ』『旅するジーンズと16歳の夏』『デス・ブルーフィン・グランドハウス』『ハッピーアワー』、リメイク版『ゴーストバスターズ』などなど、女性4人組が主役の作品は現在に至るまで数多く生まれているが、そこではたいがい4人の女性がそれぞれに持つ個性が重視され、性格や嗜好や人種が異なりながらも成り立つ友情や姉妹愛が描かれている（『ザ・クラフト』や『ミーン・ガールズ』で転校生の主人公が加わることになる画一化された集団として登場する『魔女3人組』や『プラスチックス』の3人にさえも個性が与えられる）。『タナーホール』の4人の女の子もその慣例に漏れず、それぞれに個性が与えられている。安易に描写すれば、情熱を秘めた優等生、小悪魔的な色気を持ち主、内気な芸術家、自殺願望を持つトラブルメーカー、というふうになるだろうか。

とはいえものの、この作品は、例えば『若草物語』の4姉妹のように各々の差異を殊更つまびらかにしようとはしていない。フェルナンダが真面目で、ビクトリアと折り合いが悪く、大人の男に恋をしていることくらいはわかるものの、彼女が何を好きなのか、何が得意なのか、タナーホールを出たあとどうするつもりなのかといったことは全くわからない。では、そういうものを描くかわりに、監督・脚本のフランチェスカ・グレゴリーニとタチアナ・ヴォン・ファーステンバーグは何をしているか。彼女たちは4人の少女たちの顔を映し続ける。ここでは少女た



★1

『若草物語』  
1933年版  
監督：ジョージ・キューカー  
脚本：サラ・Y・メイソン、ウィクター・ヒアマン  
撮影：ハンリー・ジェラード  
音楽：トマス・ニューマン  
キャスト：ウィノナ・ライダー、ガブリエル・ベネット、ポール・ルカス  
1993/105分/アメリカ

1949年版  
監督：ウィタイン・ヒルロイ  
脚本：ウィタイン・ヒルロイ、サラ・Z・メイソン、アンドリュー・フルトマン、サラ・Z・メイソン、ロバート・H・ブランク、チャールズ・エドガー・シェーンバウム  
音楽：アドルフ・ドイチュ  
キャスト：ジョーン・アラソン、ジャネット・レイラー、カレット・オブライエン、エリザベス・テイラー  
1949/122分/アメリカ

★2

1994年版  
監督：ジリアン・アームストロング  
脚本：ヒリアン・アームストロング  
撮影：ジェン・ウイコフソン  
音楽：トマス・ニューマン  
キャスト：ウィノナ・ライダー、ガブリエル・ベネット、ポール・ルカス  
1994/115分/アメリカ

『細雪』  
1950年版  
監督：阿部豊  
脚本：八住利雄  
撮影：山中雄雄  
音楽：早坂文雄  
キャスト：高峰秀子、山根寿子、藤夕起子、花井蘭子  
1950/145分/日本

★3

『阿修羅のごとく』  
監督：森田芳光  
脚本：筒井ともみ  
撮影：北信康  
音楽：大島健二  
キャスト：大竹しのぶ、黒木瞳、深津絵里、深田恭子  
2003/135分/日本

★4

『海街diary』  
監督：津島伸  
脚本：津島伸  
撮影：菅野よう子  
音楽：菅野よう子  
キャスト：綾瀬はるか、長澤まさみ、夏帆、広瀬すず  
2015/128分/日本

★5

『セックス・アンド・ザ・シティ』  
監督：脚本：アンド・ザ・シティ  
脚本：マイケル・パトリック・キング  
撮影：ジョン・トーマス  
音楽：アロン・ジグマン  
キャスト：サラ・ジェシカ・パーカー、キム・キャトラル、クリスティーン・デイヴィス、シンシア・ニクソン  
2008/145分/アメリカ

★6

『リンダ・リンダ・リンダ』  
監督：山下敦弘  
脚本：山下敦弘、宮下和雅子、山下敦弘  
撮影：池内義浩  
音楽：ジェームズ・ナイハ  
キャスト：ベック、前田亜季、香椎由宇、関根史織  
2005/114分/日本

★7

『旅するジーンズと16歳の夏』  
監督：ケン・クワビス  
脚本：デリア・エフロン、エリザベス・チャンドラー  
撮影：ジョン・ベイリー  
音楽：クリフ・エデルマン  
キャスト：アンバー・タンブリン、アレクシス・ブレデル、アメリカ・フェレラ、ブレイク・レイヴリー  
2005/118分/アメリカ

★8

『デス・ブルーフィン・グランドハウス』  
監督：脚本：撮影：クエンティン・タランティーン  
脚本：脚本：撮影：クエンティン・タランティーン  
キャスト：カート・ラッセル、ヴァネッサ・フェルリト、ゾーイ・ベル  
2007/119分/アメリカ